



谷戸は小さな宇宙そして桃源郷

カワセミだより

2001年11月11日発行

「奈良川源流域を守る会」

第7号

ホタルの 未来を考える

会長 野川喜一

田んぼの淵から飛び立ち、スーッ、スーッと優しく光るホタル。この谷戸に代々住みついて命をつないできたヘイケボタルです。

このホタルのために長年農薬を使わずに田んぼを作ってきました。そのため私の田にはホタルの幼虫のエサとなるカワニナやモノアラガイがたくさんいます。それにも関わらずホタルが年々少なくなっているのは、地球規模の自然の異変を含めていろいろな要因があると考えられます。

今年は、乾きに弱いホタルがどうなるか心配で、冬には私の田に隣接する休耕田の一部に水を入れさせてもらったり、春から田の一部をスイレン池にしたり、水場を作るよう努力してきました。

「今夜はどうかかな」七月に入ると、毎晩のように田んぼの様子を見に行きます。

今年六月二十六日から一月、一滴も雨が降らないほどの異常

常渇水のため、果たしてホタルが出るものかどうか心配しました。七月の初めから少しずつ出たので胸をなで下ろしたものの、例年のように数が増えず、七月末には、ほとんど出なくなっていました。そのため残念ながら、皆さん楽しみにしている「ホタルの夕べ」も中止せざるを得ませんでした。

今年少なかった理由の一つは、夜露であげが湿らないほどの異常渇水です。土が乾いてパンパンになると、ホタルは出てこれないのだそうです。来年も乾きがひどいようなら、何らかの対策が必要です。

さらに、周辺農地からの農薬の影響があります。農薬をまくところでは、ホタルは生き延びられません。谷戸の一部で使われた農薬が他の田んぼに影響しないような方策を考えなければなりません。

また、心ない人に捕られてしまうことも大きな問題です。子どもに虫かごを持たせて、網で捕りに来る人もいました。捕まえてもホタルは翌日には死んでしまいきます。ホタルの幼虫は土の中でさなぎになって過ごし、成虫になって



からはホタルはたった一週間、何も食わずに夜露を飲むだけで生き、オスメスが光で呼び合い交尾して子孫を残し、死んでゆくのです。この一週間の間に捕まえられ、交尾できなければ子孫は途絶えてしまいます。

横浜で自然にホタルが発生するところは本当に少なくなりまして。

私も会員も、できるだけのことをして、ホタルの命が続くよう守っていくつもりです。地域の皆さんも、どうぞ捕らずにそっと守ってください。

としての 川源流域の

山 奈良 将来

奈良川源流域には、上流側に土橋（つちはし）谷戸、それに続く下流側に西谷戸があります。当では設立当初からこれら源流域の谷戸・里山を保全していくことを目指してきましたが、このたび、土橋谷戸に面した約千二百坪の土地が横浜市の公園予定地となりました。源流域の里山を保全する上で大きな足がかりになると期待されます。これを機に、里山としての源流域の将来を展望します。

源流域の里山

小田急線玉川学園前駅から歩いてわずか二十分ほどのところに、思いもかけず現れる丘と丘に囲まれた田んぼ地帯、それが奈良川源流域の里山の風景です。ハヤブサ、チヨウゲンボウが空を舞い、水源の本山池には、カワセミや水鳥たちが集います。保全生態学の専門家である鷺谷いづみ先生（東京大学）は、ここを「横浜市の生物多様性の最後の砦」と表現しています。

里山とは

このような、日本の原風景ともいえる「水田、ため池、草地、林」そしてそれを結ぶ小川」、これら全体のことを里山といいます。ここでは人が手を入れて自然を利用しつつ、自然と共生してきました。里山は近年宅地開発などにより急速に姿を消しつつあり、里山に住んでいた多くの生物が絶滅の危機に瀕しています。危機にいたって

ようやく里山の価値が見直され、保全が叫ばれています。

会長に聞く里山

実際に長年里山を守ってきた会長にお話を伺ってみましょう。

会長、ここには、なんで生物が多いんですか？

会長：なんと言っても、餌場となる林や田んぼや池などいろいろんな場所があるからね。落葉樹が多いから、鳥が木の実や虫をとりに来るし、田んぼや池や川は、水生昆虫やホタルや魚のすみかになっている。それをねらって鳥たちも集まってくる。ハヤブサ、チヨウゲンボウ、ツミ、ノスリなど、猛禽類が多いのも、餌が豊富だからだね。

それに、自分は生物が好きで、ホタルのために水田を無農薬で作っているし、カキ、サクラ、ゼンリヨウ、クチナシなどの実のなる木を多く植えているからね。定期的に木を切ったり下草を刈るの

で、林の中に日が射して、山野草も多いよ。

里山では、自然をどのように利用してきたのですか？

会長：クヌギは木材として使ったけでなく、薪や、炭にしたり、シイタケの原木にしたりもしている。落ち葉は集めて刻んだ糞と混ぜて堆肥にしているよ。

田んぼに入れるには清水は冷たすぎるので、ため池を作って、その水を田んぼにまわして米を作っている。

昔と今と比べて、どこが一番変わりましたか？

会長：きれいな湧き水が少なくなっただね。昔は水が透き通っていて、ゼニタナゴは水面が真っ黒になるほどかえっただが。

会長は、この谷戸をどうしたらいいと思われませんか？

会長：子供時代、谷戸の池や川でタナゴを釣ったり、泳いだりして、夢中で遊んだ楽しさは忘れられないよ。タナゴやゲンジボタルのいる水辺を復元して、次の時代の子

供たちにも、あの楽しい体験をさせてあげたいね。

源流域の将来像

当会では源流域を、会長のお話にあるような豊かな水辺のある里

山にすることを目指して活動しています。それには今ある水田、畑、林、草地、湿地、池、川など全体を保全するのはもちろんですが、それだけでなく、失われた水環境とその水を作り出す林を復元して

いかなければなりません。そこで当会では、源流域の里山の一部分が公園予定地となったことを里山復元の絶好の機会と捉え、行政と話し合いながら里山復元のプランづくりを進めていきたいと考えています。

里山復元の提案

まず奈良川は、コンクリートの川をやめ、ホタルやゼニタナゴの住める昔の小川を復元し、丘にはクヌギやコナラなどを植え、一部は畑にして市民が楽しみながら耕作してはどうでしょうか。子供たちは川で遊び、大人たちは畑や林で汗を流し、また散歩して四季折々の里山風景を楽しめる、そんな憩いの場になったら素晴らしいと思います。

湿地の利用

また、現在、横浜市が住宅用地として取得し、暫定的に市民の利用を認めているナチュラパスの上の休耕田も、木道を作るなどしてザリガニとりをしたり、散策したり、湿地の自然が楽しめる場所として有効利用することをあわせて提案します。



子供たちの未来のために

すでに今でも奈良小学校の子どもたちがたくさん見学に来たり、遊びに来たりしています。子どもたちの作ったパンフレット(右)を見ると自然を大切に思う気持ちが伝わってきます。昆虫観察会では大勢の子どもたちが喜々として遊んでいきます。さらに虫とりのできる林、水辺で遊べる小川や湿地ができれば、なお魅力的な場所になることでしょう。

会では、池や川にゼニタナゴが泳ぐ日を夢見て活動していきます。今年も稲刈りの手伝い、虫の声を聴く会などを行い、収穫祭を迎えようとしています。冬には芋煮会やバードウォッチングなども予定しています。大人も子供もみんな楽しんでながら里山復元を目指していきたいと思っています。



土橋谷戸(つちはしやと)の北側からの眺望
この正面の斜面とその奥が公園予定地となった